

りびんぐらいぶず 平成29(2017)年6月第2号

摂取不捨の利益はエンジンとして働く

ご讃題

弥陀の本願信ずべし 本願信ずるひとはみな
摂取不捨の利益にて 無上覚をばさとるなり

（『正像末和讃』「第一首」注釈版聖典 P600）

弥陀智願の回向の 信楽まことにうるひとは
摂取不捨の利益ゆゑ 等正覚にいたるなり

（『正像末和讃』「第二十五首」同 P604）

はじめに

伝灯奉告法要では第二十五代専如ご門主の筆になる『ありのままに、ひたむきに—不安な今を生きる』というご書物を参拝者ひとりひとりに記念品としてたまわりました。本号では印象に残った幾つかの御文をご紹介します、その持つ意味を考えてみたいと思うのです。

親鸞聖人は、自分ですることのすべてを「自力」として否定されたわけではありません。親鸞聖人が否定された「自力」は、「阿弥陀さまのはたらきを疑うこと」です。たとえば「南無阿弥陀仏」とお念仏を声に出して称えるとき、称えた努力の対価としてさとりを開く、浄土へ生まれるという捉え方、つまり、（称えることを）自分の「手柄にする」ことを「自力」として否定されたのです。「南無阿弥陀仏」と声に出して称えること自体を「自力」と言って否定されたわけではありません。

親鸞聖人ご自身も、もちろん声に出して「南無阿弥陀仏」と称えられ、教えを伝えるためにお手紙や多くの書物をしたためられています。

阿弥陀さまの教えを聞いて自分のものにし、ありがたいと喜ぶ。しかし、そこでとどまっていはいないで、その喜びをほかのひとに伝えていく。そういうことは阿弥陀様のはたらきによる御恩報謝の行いであって「自力」ではありませんが、それもまた「自力」だと思っている人がいるような気がしてなりません（同書 P75～76）。

ご門主のお言葉を考える

驚くべきことのようにですが、「南無阿弥陀仏」と声に出して称えること自体を「自力」と言って否定してきたのは、実は、宗門の伝統的な教学であるご常教に由来しました。信前(信心を獲得するまで)の称名を許せば自力のはからいにおちいることなしとしないからこれを許さないとしてきたからです（これは信楽峻磨先生のご書物に当時の勸学寮とのやり取りの中で頻出します）。

信心と念仏について考えるとき、「信心」は、衆生の上でいえば、「疑いをさしはさまない」

というネガティブ表現で表現されます。ご承知のようにネガティブ表現は直接お勧めすることはできません。お勧めするとしたらプラクティカルな「お念仏」だったのですが、これをお勧めしようとする、ややもすれば先生方が拒絶反応をお示しになるのはご常教の自力トラウマに由来するかと窺われます。

この度、新ご門主様がこの点を敢えてご指摘戴いたのですから、この機会に勸学寮様には、ご常教が抱えてきたこの課題をどう取り扱うべきか見直しをして戴きたいところです。

何しろ、記念誌上でのご門主のお言葉ですから、全国のご門徒のまなざしがこの一点に注がれていると言っても過言ではないからです。

撰取不捨の利益はエンジンとして働く

ところで不肖自身は、これに続く御文の意義を考えてみたいと存じます。それは「阿弥陀さまの教えを聞いてありがたいと喜び、その喜びをほかのひとに伝えていくことは阿弥陀様のはたらきによる御恩報謝の行いであって「自力」ではありませんが、それもまた「自力」だと思っている人がいるような気がしてなりません。」という御文についてであります。

御恩報謝の行いすらも自力だと捉えて遠慮したのでは、浄土真宗のおみのりが世の中に広がっていき筈もなかったからです。

これはいかにして克服できるでしょうか。

浄土真宗では信心一つでお救いに与ると言われます。学問的には、信一念義というご論題があります。

やや専門的になりますが、信心を頂戴した状態は、仏道の五十二段階のうちでは初地（第四十一位）から等正覚（第五十一位）に亘ります。

浄土真宗の信心は如来様から賜るものだとは言っても、初地から等正覚に亘る状態を一息に頂戴できるとするには無理があります。

そこで、親鸞聖人にご指南を仰ぐことになるのであります。

ご讃題の正像末和讃第二十五首には

弥陀智願の回向の 信楽まことにうるひとは
撰取不捨の利益ゆゑ 等正覚にいたるなり

「信楽」と「等正覚」が示されています。

阿弥陀様から本願力回向された信心をまことに頂戴したお方は、撰め取って決して捨てない撰取不捨のご利益を頂戴する。このご利益ゆゑに「等正覚」にいたると示しておいでです。

「正像末和讃」の第一首は、「等正覚」がお浄土に誕生して頂戴する佛のおさとおりである「無上覚」となった点だけの相違であります。

「いた（至）る」と示しておいでですから、「信楽」を得た初地から「等正覚」という第五

十一位に至る道行きがあることが知られます。

言い換えれば、ここには「信心の道」が続いていたのだと頂戴するのが自然です。

実は、嘗て「信心の道」を提唱された信楽峻麿先生（Ref「親鸞における称名の意義」真宗学五十五号）に対して、勸学寮の稲城選恵和上（「最近における真宗安心の諸問題 龍谷大学・信楽教授の所説に問うー」百華苑刊）がそれは浄土真宗の信心ではないと否定された論争はあまりにも有名です。

ともあれ、ご講題の御文から「信心の道」が存することがうかがわれます。

問題は、「摂取不捨の利益」がどういう位置付けにおかれてあるかです。

「ゆゑに」とお示しですから、それが原動力（エンジン）になって等正覚に至ると頂戴できるのではないかということになります。

その原点は、〇和上からお聞かせに与るように、昔のお同行は「浄土真宗のみ教えはありがたい。ありがたい。」と言って育って行かれた。お法りが自然に伝わっていくには「ありがたい」「楽しい」というポジティブ経験をエンジンとして取り入れられねばなりません。

信益同時と言われる「摂取不捨の利益」の中味を開けば、信巻末の「現生十益」（注釈版聖典 p251）になります。

一つには、冥衆護持の益、二つには、至徳具足の益、三つには、転悪成善の益、四つには、諸仏護念の益、五つには、諸仏称讃の益、六つには、心光常護の益、七つには、心多歡喜の益、八つには、知恩報徳の益、九つには、常行大悲の益、十には、入正定聚の益。

「ありがたい、楽しい」という益は、七つ目の「心多歡喜の益」に当たることが知られます。

「九つには、常行大悲の益」は、今生での浄土真宗の「利他行」を表しています。

これらは「金剛の真心を獲得すれば、横（おう）に五種八難の道を超え、必ず現生に十種の益を獲（う）とされるその内容であります。

「横に」とは、阿弥陀如来の本願力によってという意味であり、「五種八難の道を超え」とは、もはや六道輪廻から断ち切れ浄土往生間違いない身と定まるご利益であることも知らせる御文であります。合掌。

（後書）「澄浄」は「喜悅」という概念も併せ持つ事態だとお聞かせに与っていますが、それは、称名し聞名を繰り返す間にとうとう恵まれるのだということは信楽峻麿先生のご書物に繰り返し現れて参ります（例えば、『教行証文類講義』第四巻信巻一 p19）。「喜悅」は受け止め易いポジティブな概念であります。

そうすると、信心の道は、「聞名」「澄浄（信楽）」「称名（讚嘆）」の「聞名ループ」で視覚的に捉え直せば、いつしか摂取不捨の益の一つである澄浄（喜悅を伴う）を賜りそれが信心が深化する次のサイクルのエンジンとなって働くのだと頂戴するのが自然です。

「聞名ループ」のループ（回転）は、丁度朝顔の蔓がお日さまに向って伸び続けるようなお育ての信心の道を表す概念だったと説明できるのであります、合掌。

宗祖七百五十回大遠忌実行委員会六月十一日十九時 仏教婦人会例会 六月十六日(金)十九時半より 正覚寺常例布教 お客僧 瓜生 崇師、六月十七日(土)十四時より 著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地 077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥
--